

市民社会の時代の「健康福祉」の理念を理論と実践に生かす市民講座

## わが地球、わが健康、しかし変化したニーズ 地球規模で考え、地域規模で行動しよう

既成観念を見直し、人間性回復の問題解決の考え方を見通そう



「全体の中に部分があり、部分の中に全体の本質がある」

科学哲学者 A.ケストラー

会場 松本市中央公民館 (連続する金曜日の午後七時~九時に開催)

2003年8月29日、9月5日・12日・19日・26日、10月3日

共催

松本市中央公民館

NPO法人 松本地域の精神保健福祉を考える会

## 序 言

私たちは松本市で「福祉」に係わる市民公開講座を七年ほど中央公民館で続けた実績がある。当初、公民館で福祉を取り上げるなど論外という雰囲気があったが、その後は世の中でも福祉が生活用語に間違いなく落ち着いてきた。

ところが、最近「福祉」が変な方向に一人歩きし始めたような感じが身近ではじめている。いろいろな局面があるが、例えば従来なら「保健医療」と言っていたのを、聞こえのよい「健康福祉」と言葉だけ置き換えることが多い。これでは市民社会の時代の共通の願いとして使い始めた健康福祉が形骸化してしまう。そのため、何とかしたいと模索しはじめていたら、今回の市民講座の世話人会を結成する機運が芽生え、現在の企画の立ち上げになった。

この講座自体は対話重視の少人数の集会とし、事前に入念な準備をして「研修ガイドライン」を作成することになった。私はこれまで多様な研修会を国の内外で企画し、運営してテキストを作成することは多かったが、今回のような研修ガイドラインを編集するのは初めてのことである。幸い、世話人達の前向きな参加を得て短期日にこれを作成できたのは有り難かった。

これまで私たちは<健康文化>に関する多様な研修会を開催してきた。今回は「健康福祉」を入り口に、その教育研修と地域ケアの総合化を通して<健康文化>の理解にどう生かすか考えることに最大の努力を注いだことが、この研修ガイドライン作成に繋がっている。そんなことから、次ページにはこの研修ガイドラインを鳥瞰するような図説も入れたので、先ずはご覧を頂きたい。

この編集作業を通して、健康福祉と健康文化が近い関係にあることを表すことができた。そのため、今回の企画の経過と成果は来年度以降の新たな事業に生かそうと申し合わせをしており、そのためにも今回の市民講座は慎重に展開したいし、世話人も参加者もその積もりで前向きな討論に臨んで頂きたい。

2003年8月22日

丸地信弘

## 発想の転換に役立つ WIFY 交流学習の心得

今回の健康福祉の市民講座では WIFY(What Is Important for You)という相互研修キットを用いるのが特徴ですので、その実施に関する説明を事前に致します。

WIFY は質問紙を用いますが、それは単なる手段です。自分の曖昧な問題意識を徐々に広げ、その確からしさを仲間や市民、あるいは外国人と比較して、自分の主体性を対話的な姿勢で高めることを修得します。

WIFY は四段階でワンセットになるよう組み立てられています。今回の研修ガイドラインの三章にその意味付け等を記しましたが、**第二回の研修会**(9月5日)に WIFY1 を配布しますので、自分の素直な気持ちを回答にご記入ください。

今回の市民講座の**三回目**(9月12日)に WIFY2 を実施しますが、その時には二回目の WIFY の結果を活用し、自分の特徴の再確認をします。そのため、二回目の回答分は実施後に回収し、三回目に再配布します。そして、四回目(9月19日)と五回目(9月26日)は、健康福祉の特定課題に関する質問を行います。

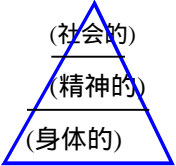


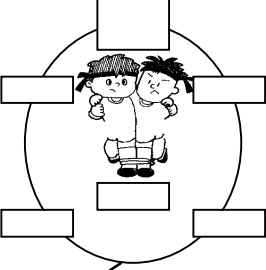
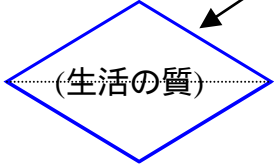
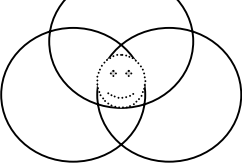

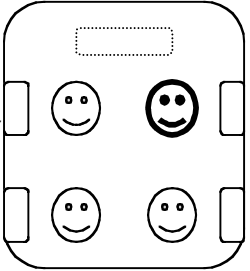
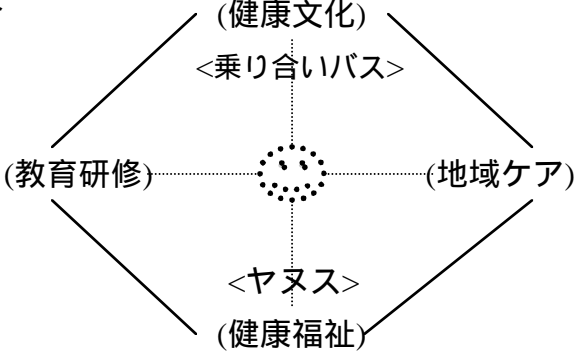
このようなことから、**第二回研修会の記入は「二十分」程度で**終わってください。各項目は五項目に限定しますが、これは手足の指が五本ずつあるのが普通という程度にご理解ください。また、各々の枠に書き込む言葉はキーワードで簡潔に表すようお願いいたします。

誤解を防ぐため申し上げますが、WIFY は決してテストではありません。素直なあなたの気持を表現し、参加者との話し合い、外国での実施結果などと比較して、自分の発想を確認し、もし問題を意識したら、ご自分で改める人間性回復の生涯研修の機会にしてください。

誰も経験ないことは不安を覚え得ますが、市民講座の展開に合わせて WIFY を実施することで、自分を再確認することになるでしょう。

文責 丸地信弘

付図 1 市民社会の時代の「健康福祉」に関する総合接近の道案内

| 章立て                                   | 構造   | 全体  | 機能   |
|---------------------------------------|--|---|--|
| <p>一章 目標<br/>温故知新<br/>(図 1)</p>       | <p>従来の健康観(静的、分析)</p>  <p>(公助)</p>     | <p>健康福祉(共助)</p>  <p>(自助)</p>  | <p>新しい健康観(動的、統合)</p>                  |
| <p>二章 方針<br/>二人三脚<br/>(図 2)</p>       | <p>自律<br/>二人三脚は共助<br/>でチームワーク<br/>の調節の原型だ。</p>   |   | <p>規範<br/>健康福祉の目標<br/>達成には四本の<br/>柱が必要になる。</p>   |
| <p>三章 指針<br/>三位一体<br/>(図 3A.B.C)</p>  | <p>研修知識<br/>(生活の質)</p>  <p>A.知識</p> | <p>平衡姿勢</p>  <p>B.姿勢</p>  | <p>対策実践<br/>(組織の質)</p>  <p>C.実践</p> |
| <p>四章 指標<br/>四本の柱<br/>(図 4)</p>       | <p>乗車要員</p>  <p>主体原則</p>           | <p>組織原則</p>   | <p>保健開発</p>  |
| <p>五章 自律体制<br/>質の保証(評価)<br/>(図 5)</p> | <p>統合</p>  | <p>(健康文化)<br/>&lt;乗り合いバス&gt;</p>  <p>(教育研修)</p> <p>(地域ケア)</p> <p>&lt;ヤヌス&gt;<br/>(健康福祉)</p> | <p>分析</p>  |

(N.Maruchi, 2003.8.22)

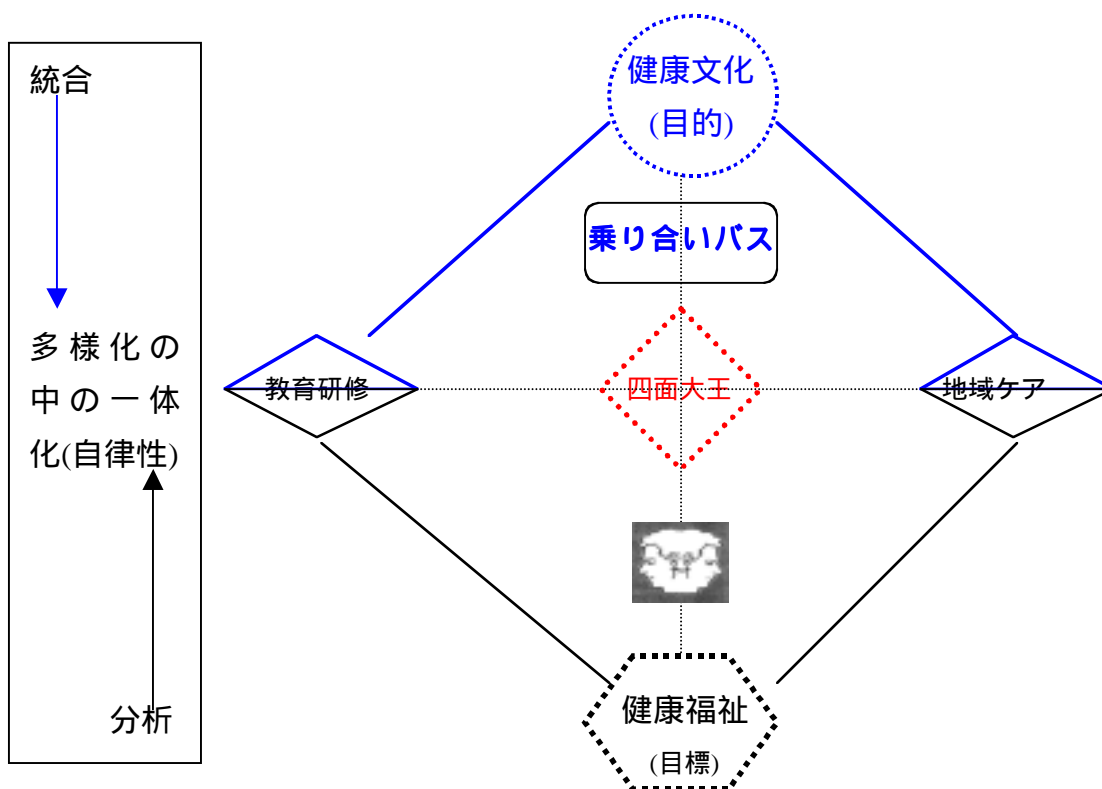
## 付図 2: :市民社会の時代の「健康文化」の感覚的理解

付図 1 は今回の研修ガイドラインの学習過程である。その点、付図 2 は図 5 を簡略化した地域開発に向けた健康文化の自律体制を表し、これは<価値転換>を意味する。

この図の原型は今回講座の準備段階で早く浮かんだが、具合良く説明できなかった。しかし、世話人会の最後の話し合いで、公民館の高橋さん等が付図 2 に関心を寄せたので、丸地はこれを「新しい健康の定義(図 1 右側)」と関係づけ説明したいと考えた。

そんな中で、社協の山本さんは「精神の地域ケア(身体的幸せ)」、世話人達は「健康福祉の教育研修(精神的幸せ)」に身近な素材を盛り込む話題が中心になり、両者を調和する健康福祉(社会的幸せ)のヤヌスの立場(付図 2 の下半分)から抜け出せなかった。

しかし、自律的な地域開発では、真ん中の四面大王は<多様化の中の一体化>を四方に向けるため、四輪駆動の乗り合いバスに象徴される健康文化(全霊的幸せ)の体制で「質の保証」(動的状態)を図ることが共通基盤である。所が、普通はそこまで<価値転換>が起きないで、前記のヤヌスの平衡だけに安住しやすい。



# 「健康福祉」に関する市民講座の研修ガイドライン

～<健康文化の時代>の地域開発を目指す生涯研修～

当講座の世話人会コーチ 丸地信弘(2003.8.22)

**お前は他人の見えないことを観る努力をせよ。そして、それが見えたと人々が言うまで努力せよ。(フランスの劇作家 モリエールの言葉)**

## はじめに

今日では「健康福祉」は心地の良い言葉だが、それが市民権を得てから未だ日が浅い。この用語は市民社会の時代として感覚的に受け入れやすい表現であり、人々の共通の想いを表し、行政的にもよく使われているが、その受け止めは実に多様である。

今回の市民講座に際し、ある種類の問題意識を共有している人達が世話人会をつくり、事前に幾度となく話し合いしている内に、このような「研修ガイドライン」を作成することになった。それは考えて見たら自然の成り行きであったが、共通の想いを言葉にすることに自ずと限界もあり、幾つかの<共通感覚モデル>も加えることにした。

私たちは現代生活の中である種類の言語概念をもっているが、それが市民社会の時代の健康文化ないし健康福祉の目標達成に役立つのか確かめないまま過ぎしやすい。しかし、既存の価値観に依存しては問題解決が困難だと気付いた人達は「発想の転換」を模索しており、私たち世話人会もそのことを意識して検討しはじめた。

今回の市民講座は幾つかの試みをしている。過去七年間の公開講座の類似テーマの討論で感じた教育研修的な事柄を丸地が整理して提示し、世話人達が参加市民への触媒役になる努力をして今回の研修ガイドラインを作成し、それをテキストに使用する。この指針には WIFY 交流学习という自己意識を価値転換する方法が組み込まれており、「参加者の主体化を同席者との前向きな話し合いで自覚する仕組み」が特徴である。

健康福祉の**保健開発**を正しく理解する対話的な教育研修をしてからでないと、健康文化の地域ケアの事例検討など出来ないのは明らかである。そのため、本稿は市民社会の時代の 1.「健康福祉」が目標達成のため、2.基本方針、3.研修指針、4.実践指標、そして 5.究極目的の健康文化の質の保証(評価)をする研修ガイドラインになった。

## 一章. 温故知新の精神で目標の「健康福祉」を主体的に捉える

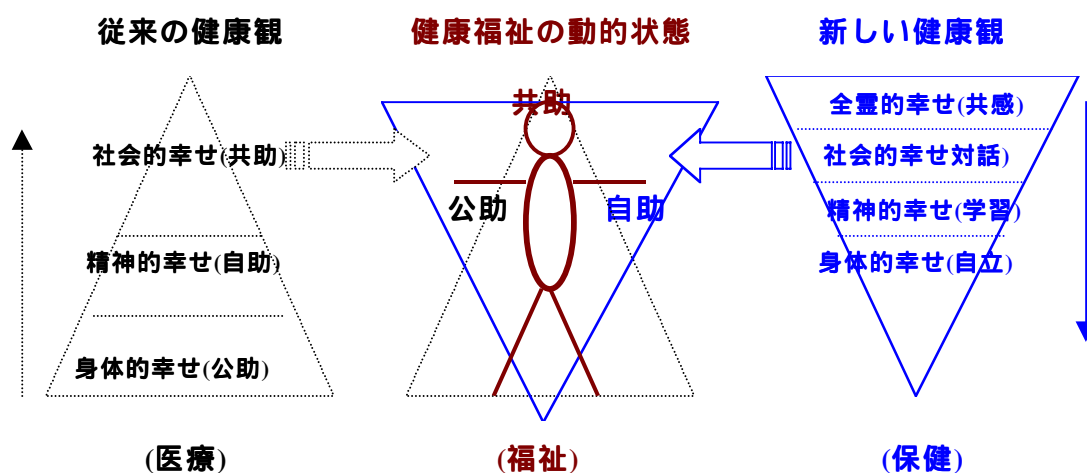
従来の健康観(図 1 左側)は個人と集団の自然科学的な分析技術(静的状態)に向けられており、図 1 の下に記した保健、福祉、医療と分けたがる姿勢が、専門家だけでなく、多くの人の発想の中にも潜んでいる。松本でも最近では地域福祉から町会福祉も出ているが、これも同列の見方のように、それだと住民参加は建前だけの公助になる。

一方、新しい健康観(図 1 右側)は社会科学的な組織活動に向いている。これは<主体化の四原則>と関連づけると、身体的幸せは<自立>、精神的幸せは<学習>、社会的幸せは<対話>、全霊的幸せは<共感>に相当し、主体化の四原則自体は<動的状態>と読み替える。しかし、この<新しい健康の定義>は内外で正しく理解されてない。

その点、両者の併用(図 1 中央)は人間科学的な「健康福祉」であり「福祉と保健医療の連携」を目指す動的認識になる。新旧の健康観は人の左右の腕で自助と公助であり、その頭部(頭脳)は共助になり、この福祉の三原則は二面神(ヤヌス)に相当する。

そこで、「健康福祉の共助」に文化規範の温故知新・二人三脚・三位一体・四本の柱を位置づけると、この「健康福祉」の主体的立場(ヤヌス)は本稿の最初の四つの章の目標・方針・指針・指標をそれぞれ象徴する自律概念になる。すなわち、温故知新は図 1 の真ん中の人の時空一体の人間特性、二人三脚は左右の脳の主客一体、三位一体はそれを維持する小脳、四本の柱は質量一体を図る両方の手足と見なせる。その意味では、最後の五章は文化規範の全体像に相当する健康文化への価値転換といえる。

図 1: 温故知新の精神で「健康福祉の自律特性」を捉える



### 人間中心の自律(調節)規範となる文化規範の二つの特徴

丸地が人間中心の保健開発を志した過程で 1996 年に日中合作で「文化規範」が生まれた。それは個人から徐々に組織化される四段階を 温故知新、 二人三脚、 三位一体、 四本の柱とする、本稿で言う自律規範の提案であった。

この四つの特性は本稿の一章から四章を特徴づけると共に、それらは文化規範を象徴する自律調節モデル(下記の図 2)に集約すると、本稿の保健開発の全体も部分も表される**機能的特性**がある。これは科学哲学者ケストラーの名言「全体の中に部分があり、部分の中に全体の本質がある」に符合する人間中心の自律特性の一つである。

また、三章で使われる二つの「逆さ富士モデル」の場合も、文化規範の四項目を念頭に置くと、個々の**構造的特性**が理解しやすくなる。その意味で、言葉だけで表しきれない時、本稿のような共通感覚モデルを併用するとよいことに気付いてほしい。

当初の世話人会で「地域」と「環境」が前後して話し合われた。何れも人間社会の問題改善を前提にすると、弾力的に理解すべき事柄なのに、特に<地域>に関しては定義的に捉える固定概念が根強い。そこで、今回講座では「福祉と保健医療の融合」を目指す<地域接近>を<保健開発>と呼び変えたので、その検討から始めたい。

## 第二章. 保健開発の人間科学の基本方針になる「二人三脚」

一章の説明は自然・社会・人間科学的発想の順で理解するという姿勢があった。しかし、人間社会の問題解決は「文化規範の自律管理」の人間科学が基盤になり、その部分に自然・社会科学が入れ子になる<福祉と保健医療の融合>が精神だと再確認したい。換言すると、一章を受けた**第二章の基本方針は二人三脚のチームワークであり、夫婦による自律体制の確保のような、社会で「当たり前」なことの再確認である。**

市民社会の時代の地域活動には多様な事柄が含まれるが、人間中心に考えたら何れも健康福祉を目標にしているから、それを本稿では「保健開発」と総称することにした。前記のよう、健康福祉の**保健開発**を正しく理解する教育研修(規範)をしてからでないと、その地域ケア(管理)の事例検討など出来ないから、これは図 2 の二人三脚であらわし、その三脚部分に<福祉と保健医療の連携>が入る。そして、図 2 の支援環境には前記の目標達成の四項目(方針、指針、指標。価値転換)が入ることになる。

漢字文化の「温故知新」や「二人三脚」の原義に相当する英語の簡潔な熟語はない。

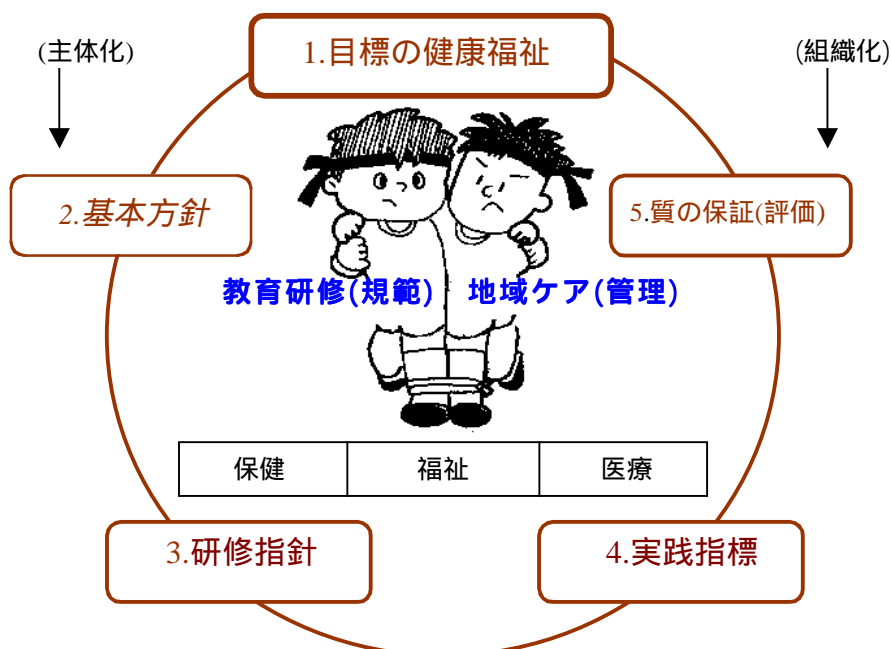
本稿はこの東洋文化の精神を基盤に、後記の「三位一体」や「四本の柱」のよう西洋思想にも繋がりやすい概念を科学技術として融合する。従って、人間中心に総合問題解決を図ろうとする<多様化の中の一体化>の心意気があり、これは自己矛盾がない。

二人三脚の精神から Two-in-One の発想が生まれ、健康福祉や自律管理のような複合概念の表現が本稿では重要になる。しかし、分析思考が中心の人には健康福祉は従来の保健医療と同程度の便利な言葉として使っているようである。なお、英語で二人三脚は「三脚レース」と呼ばれ、競争概念が先行している。その点、漢字文化では二人三脚はチームワークを意味し、三脚は後記の三位一体とも繋がりやすい便利さがある。

二章の説明の背景には「調節と規範」があるが、その現代的理解には企業の事業開示(disclosure)のことを思いつくとよいだろう。調節は組織管理、規範は文化規範を意味し、図 2 で前者は真ん中の二人三脚、後者は支援環境となる目標達成の五項目を指している。なお、日本語では調節は管理、制御、自律など多様に受け止められている。

図 2: 健康福祉の保健開発の基本方針は「二人三脚」

~文化規範の自律管理的な認識~



世話人の高橋さんは、当初の草稿はここで思考が停止したという。それなら次の改訂版では WIFY による保健開発の教育研修から実践活動(地域ケア)への過程を主体化

の側面から強調しようと丸地は考えたら、三章の三位一体の研修指針が生まれた。

そして、図 1 の右側に記した「新しい健康の定義」を本稿に応用すると、その動的認識は図 2 に相当し、身体(物理)的幸せは図 3A、精神的幸せは図 3B、社会的幸せは図 3C、そして全霊的幸せは図 4 の四輪駆動モデルに相当することにも気付いた。

**以上が市民講座一回目の研修項目： 世話人会の動向を素材にする。**

1 回目の講座での自分の気づきと問題意識を記しておこう。  
まずは世話人達がこの研修指針作成でどんな苦勞をしたか話して貰う。

市民社会の時代の「健康福祉」の意味を感じ取ることができましたか？  
事前に今回の研修ガイドラインを読みましたか？ どんな感想ですか？

### 三章. 健康福祉の保健開発に係わる「三位一体」の研修指針

この三位一体の研修指針は、図 3A と図 3B と図 3C を知識と姿勢と実践とみよう。三章は先ず個人の主体性の確立を研修し、そして対話による目標達成の組織化を重視しており、それには四段階からなる<WIFY 交流学習>の果たす役割が大きい。

WIFY は 1999 年に福岡大学の守山が原型を考案し、丸地が手助けして内外で数多くの教育研修に使われているが、松本市民の公開講座で系統的に取り入れたことがない。何れにせよ、WIFY 交流学習は健康福祉と健康文化の触媒となる働きがある。

#### 1) 保健開発の教育研修と地域ケアの相似(静態)的理解

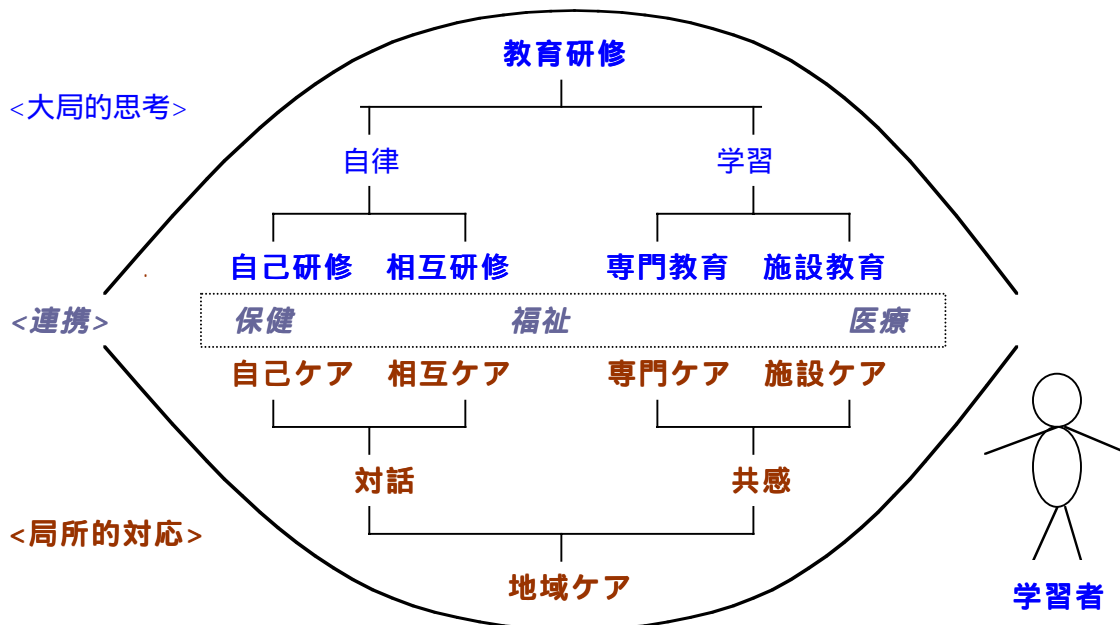
図 3A.C の「逆さ富士」は美しいが、普通それを見る人がいる説明を忘れやすい。それ故、図 3A.C 右下の人は図 1 の真ん中に立つ人間と意識すると、図 3A.C は図 1 の変形である。図 1 の左右は福祉が中核の<補完>概念だが、福祉の主体的意義を忘れると左右を対立概念と錯覚し、それは「**主体化の四原則**」を軽視するためである。

そこで、図 3A は図 2 の保健開発の基本方針を研修指針の知識体系に組み替えたものであり、上の教育研修と下の地域ケアは「福祉と保健医療の連携」を中核とする物理的な<相似>認識であるが、教育研修は大局的思考、地域ケアは局所的対応である。

なお、この図 3A の構造分析には文化規範の四項目を念頭に置くと分かりやすい。

**図 3A: 保健開発の教育研修と地域ケアの相似(静態)的理解**

~生涯研修に基づく地域ケアの主体的認識~



多くの人は文化規範の自律特性を無視した定義的観点に慣れているから、この保健開発の心得を確認しないまま、偏った地域ケアに係わる傾向がある。自己研修と事例研究を日常化する対話的な「生涯研修」を重視する理由はそこにある。そのため、今回の研修ガイドラインの表紙に 1990 年の地球環境年の標語「わが地球、わが健康、しかし変化したニーズ、地球規模で考え、地域規模で行動しよう」を引用している。なお、教育研修/地域ケアの四項目は後記の WIFY 交流学习の四段階にほぼ相当している。

### 逆さ富士モデルに秘められた魔力

日本では広重の「逆さ富士」は有名だが、本稿の<逆さ富士モデル>にはその観察者が必ず登場することを人間中心の観点から特に注目して頂きたい。

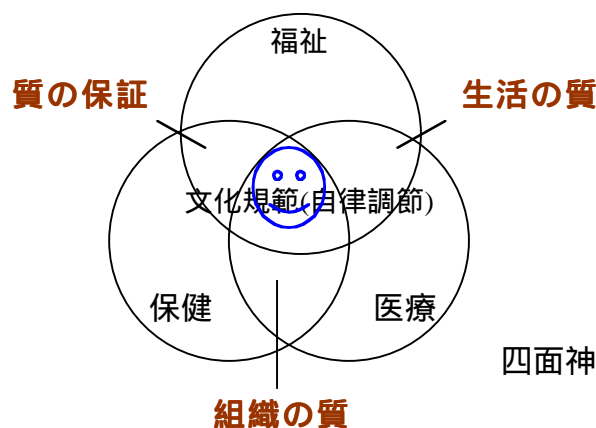
現在の本稿の流れに従えば、図 3A の内容は当たり前だが、8 月 4 日の世話人会で高橋さんの問題提起がなければ、丸地は図 3A を考案しなかった。人には面白い直感力があり、理由は分からないが変だという疑問を抱くことがあり、丸地も今回はそれに助けられた。実は、後記の図 5 は「健康文化」の質の保証の枠組だが、それも図 3A を踏み台にして、本稿作成の最終段階に誕生した経緯があり、これは四面大王にも映る。

## 2) 健康文化への価値転換に必要な三つの質

個人の健康は福祉の三原則(公助・自助・共助)でバランスをとるように、集団対策では前記の「福祉と保健医療の連携」が決まり文句である。その意味で、<健康文化>の自律体制の確保には三つの質(生活の質、組織の質、質の保証)が図 3B のよう係わるが、この全体バランスで真ん中の調整役は「文化規範の自律調節」が要請される。

上記の「三つの質」は ISO(国際標準規格)として国際的に知られた用語であるが、従来は<生活の質>が知られており、組織の質や質の保証は馴染みない概念である。何れにせよ、三つの質は従来の健康観あるいは健康福祉に係わる類似用語より、市民社会の時代の健康文化の自律機能を重視すると心得たい。また、前後の二つの逆さ富士モデルは補完関係にあるから、図 3B を軸に目標達成まで<メビウスの環>のよう循環すると見なせるし、図 3B は既述の西洋の二面神(ヤヌス)より次元の高い東洋(中国や日本)で知られた四面仏(大王)に例えた方が本稿の主旨を反映するだろう。なお、この図 3B が念頭にあると、後記の図 4 の乗り合いバスの四つの要員も説明しやすくもなる。

図 3B: 福祉と保健・医療の連携に必要な三つの質の自律体制



## 3) 健康文化の地域ケアの実践展開の入れ子(動態)理解

図 3C は昨年(2002)春に丸地が提案した WIFY 交流学习の原型に近いが、その時は空気中の自己ケア(研修)と相互ケア(研修)、水面上の専門ケア(教育)と施設ケア(教育)に WIFY1,2,3,4 に相当する事柄が配置されていた。

WIFY 交流学习の活用は、分野と国境を越えて、大きなインパクトを与えることは間違いないことを私たちは数多く体験している。しかし、それが如何なる仕組みでそ

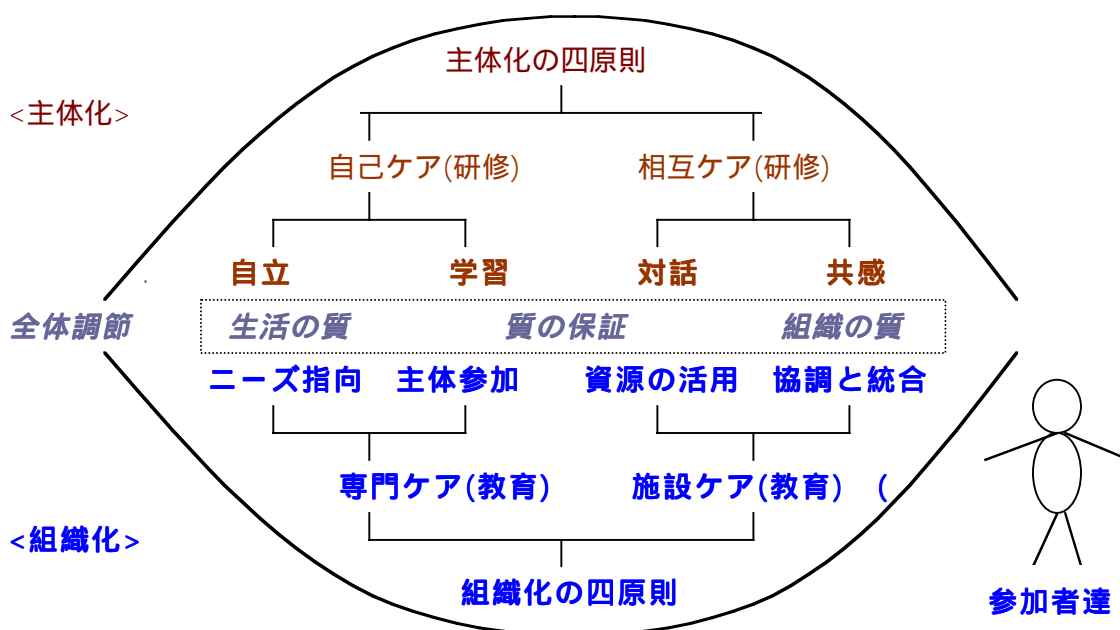
うなるのか昨年までは具合良く説明できなかったが、現在の三章の再編により、図 3C を健康文化の組織化に向けた実践に展開できるという気持ちが湧いてきた。

何れにしても、ここでは空気中の水際にある「主体化の四原則」を前提にするから、それが水面上の水際の「組織化の四原則」の主体参加に<入れ子>に収まる性質がある。これは以前から意識していたが、その前提に図 3A の相似(静態)的理解がなければ役立たないし、これで図 3C から四章の図 4 の四輪駆動モデルも理解しやすくなった。

最近まで丸地も図 3A の研修指針の基礎知識もないまま、WIFY 交流学习が地域接近の教育研修に役立つと誤解していた。しかし、対話的な WIFY 交流学习を体験すると多くの人が元気になる理由は、三章が三位一体になるよう四段階で相互研修するからだ WIFY の産婆役になった丸地は改めて知った。

図 3C: 健康文化の地域ケアの入れ子(動態)的理解

~地域ケアは自己ケアから始まる~



本稿に基づく「生活の質」は主体化の四原則で図 3A、「組織の質」は組織化の四項目で図 3C から編成され、何れも図 2 の自己調節モデルに表わせる。なお、健康文化の「質の保証」も同様に自己調節モデルに表わされるが、これは四章の図 4 の説明で位置づけし、その応用は五章の図 5 で述べたい。

### 普通の人には<健康文化>の意味を意識しにくい

本稿の三章をほぼ描き終えた時、別の NPO 法人の関係者と話し合う機会があった。丸地は彼等と可成り交流があったが、彼らがシンクタンクの当法人と家族会を混同していることが分かり、これが当法人の働きが分かり難いという一般事情だと知った。

そう自覚したら、当法人は「精神保健福祉」を素材に<健康文化>のあり方を検討するから三章の図 3A、B、C に注目しているのに比べ、概して一般市民は図 3C のある部分を、「健康福祉の統合的視点」というより、「保健医療の分析的視点」で捉えていると分かった。以前、この三位一体を自転車運転に例えて家族会の人達に説明したことがあるが、彼らはその比喻は理解し難いと言ったことを思いだした。後輪の全体(図 3C)を意識しなければ、後記の四輪駆動の乗り合いバスなどもっと連想し難いだろう。

何れにせよ、健康文化は<多様化の中の一体化>の精神が真髄であるから、それには東洋の四面大王(図 3B)のよう地球規模で考え、西洋の二面神(図 1)のよう地域規模で行動するよう幅広い社会経験を積むことであろう。

### 三章は主題に関する「発想の転換」：WIFY1-3 も含めて第二~四回の討論展開

WIFY 交流学習も入れた 2、3、4 回講座の気づきと問題点を記しておこう。

二回目は三章全体を意識する為、精神の考える会と家族会を素材にする  
三回目は教育活動が適当だから、それに見合った身近素材が必要になる。  
四回目は調整活動が中核だから、六井さんの田川経験を素材に取上げる。

いろいろな素材提供をうけ、この三章の意味付けが深まりましたか？

WIFY 実施の感想は？ あなたに、どんな発想の転換があった？

### 四章. 健康文化の地域ケアは「四輪駆動モデル」が実践指標

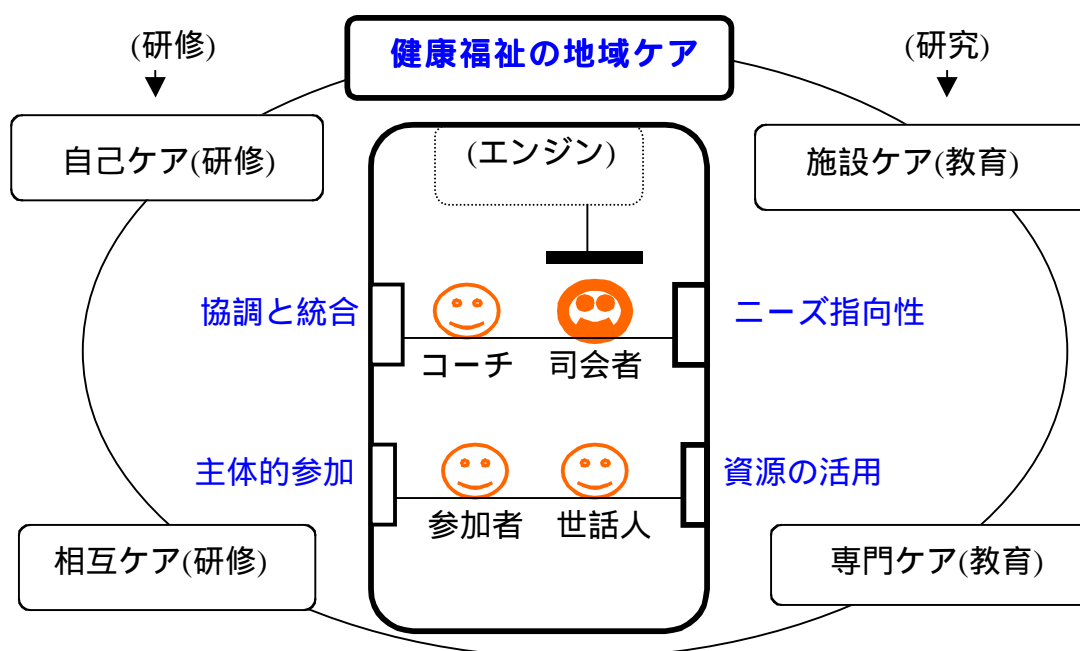
上記の図 3C の「逆さ富士」モデルは人間中心の地域ケアの観点から図 4 に組み替えることが新しい健康の定義の社会的幸せから全霊的幸せへの格上げだと理解すると良い。全霊的幸せは新しい健康の定義で盛り込まれた言葉であり、自動車のような自律動態を意味すると心得よう。ところが、この言葉が提案された当初はその言葉の定

義づけが論じられたが、全体の中で感覚的に受け入れるような姿勢ではなかった。

図 4 には乗り合いバスに同乗する四種類の人がいるが、これは図 3B の真ん中の調整役が運転手(司会者)、福祉は助手席のナビゲーター(コーチ)、保健は住民(参加者)、医療は専門家(世話人)が相当し、これらは既述の四面大王の分担機能ともいえる。その他、図 4 への配置は図 3C を文化規範の四項目で検討すると、自然に配分できる。

保健開発を目指す教育研修や地域ケアも、その実際は人間中心に捉えたら図 4 の 4WD に集約されることに変わりはない。もちろん、今回の健康文化に関する市民講座の展開も図 4 の体制になるよう世話人は心がける必要がある。世話人の中から毎回の司会役が選ばれ、その進行が安全運転になるよう丸地がコーチ役になる申し合わせをしており、その他の世話人もグループ討論が円滑に進むよう調整役(調節規範)になる。

**図 4: 健康文化の地域ケアに関する市民講座の構造と機能**  
~全体と部分の自律調節を図る「三つの質」の調和~



ここで健康文化の隠し味の三つの質について自律調節の面から改めて言及したい。「生活の質」は自動車のハンドルであり、これは図 3A から引き出される。そして、「組織の質」は自動車のエンジンに相当し、これは図 3C から引き出される。そして、「質の保証」は運転手(司会者)が心得ていたい安全運転による質量一体の効果判定の枠組

であり、これも前二者と同様に自律的な自己調節モデルに表される。

なお、図 4 の前の車軸は教育研修の組織化、後の車軸は地域ケアの集団化とみると「質の保証」が分かりやすい。何故なら、自己調節モデルによる「質の保証」の表現では、二人三脚は市民社会と地域住民が福祉の三原則で表され、その支援環境の効果判定は組織化の四原則と組織査定、対象集団と統計分析だからである。この「質の保証」は関係者が組織活動の経過と成果を質量一体の観点から効果判定する技法であり、健康文化の地域開発に向けた自律的な総合評価と呼んでよく、四面仏(大王)の統合機能といえる。この演習は今回講座の経過と成果に関して最終回に具体的に検討したい。

#### **本稿の捉えは社会生活(生態)の縮図である**

ここまで本稿を書いたら、上記の捉えは人間に限らず、動物世界に共通する自己組織化の過程と同じだと思いはじめた。すなわち、動物の日常生活では雌雄(教育研修と地域ケア)の二人三脚が基本原則であり、その研修指針の知識と姿勢と実践の総理解は、両者の補完関係、家庭の自律確保、それで新しい自律的組織体(子供)が誕生したら、それを育て、その社会的働きを自律性に照らし総合評価して平衡を保とうとする。また、図 1 は二面神、後記の図 5 は四面仏(大王)と象徴すると健康文化に繋がり易い。

考えてみたら、これも当たり前のことだが、多くの人がそのような普遍的な捉え方をしていないのが現実であり、自分もこの結論に到達するのに相当の年月を費やした。

#### **四章は全霊的な自律動態の体制理解: WIFY の四回目も含めた五回目の学習**

なぜ、市民社会の時代の健康福祉に向けた地域ケア活動は四輪駆動車か?  
五回目は健やか健康教室を素材にしたら、既成資料が活用できるだろう。

組織活動の中であなたは主体的立場に立つことが出来ると思いますか?

今回の市民講座が四輪駆動車で動き出したと思えますか ?

## 五章. 地域開発の観点から健康文化の自律体制を捉える

本稿は「健康福祉」の基礎認識から始まり、最後に「健康文化」に価値転換するから、その自律体制は地域開発の観点から図 5 に要約できる。すなわち、図 5 は図 3A の逆さ富士モデルを再編した格好であり、市民社会の時代の<地域開発>の思想が盛り込まれている。特に、上部に**保健教育(主体化)**と**保健対策(組織化)**、下部に**教育研修(規範)**と**地域ケア(管理)**があり、この四項目は「地域開発の四原則」と呼べる。そのため、図 5 は三章の図 3A と図 3C の心眼(隠し味)に相当する「四面仏(大王)」に映るから、本稿の冒頭で付図 2 のよう簡略化して説明している。

すなわち、真ん中に立つ四面仏(大王)は全霊的立場で上方の<健康文化>を目的とする姿勢にたち、下方の<健康福祉>が目標になる。この目標達成のため市民社会の時代の教育研修をするが、その知識は地域ケアに生かすから、それには「二人三脚」の精神で臨み、教育研修と地域ケアのバランスを図るから、全部で四本の柱となる。

そして、健康文化の地域ケア活動の展開は、図 4 の四種類の役割の人達とチームワークを組むから、上方の四輪駆動の乗り合いバスを連想したい。しかも、このチームワークの経過と成果は「質の保証」の自律体制の観点から安全運転の確認になる。

図 5:地域開発の観点から健康文化の自律体制を捉える

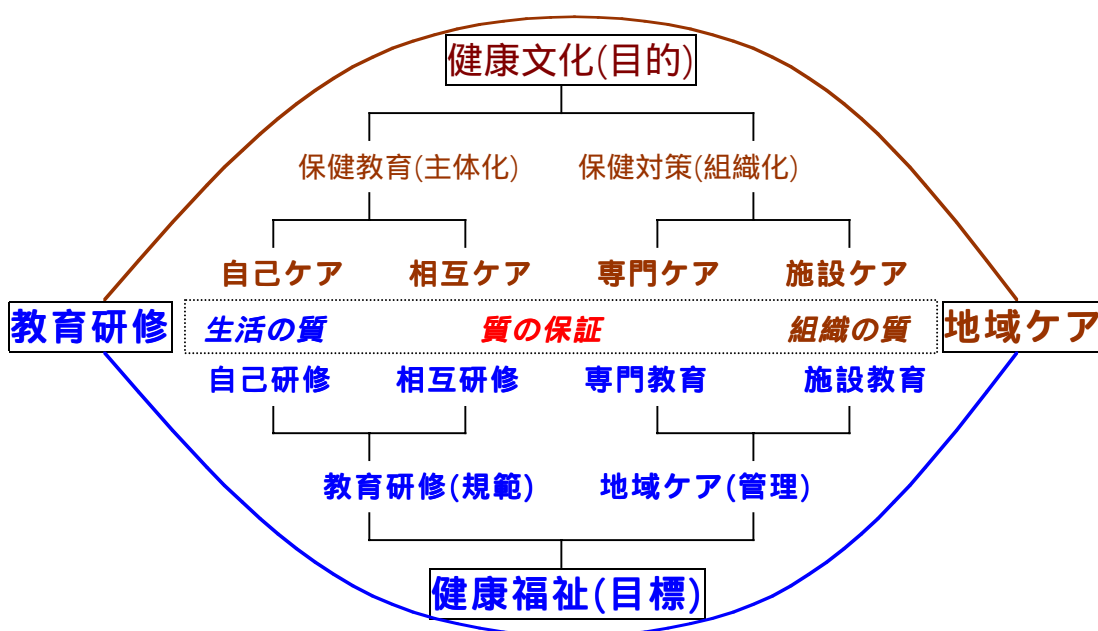


図 5 の全体像は、市民社会の時代の自律的な「地域開発」を目指す健康文化の理解に好都合な説明である。しかし、実際には健康福祉を目標とする教育研修と地域ケアの総合的な修得から始め、その際に WIFY 交流学习で価値転換をしないと、上のような人間性回復の地域開発の理論(健康文化)と実際(健康福祉)は理解できない現実がある。それゆえ、1990 年代の「多様化の中の一体化」という生物社会に共通する思想がある。

### 五章は理論から応用への道筋:今回の市民講座の経過と成果を見直す最終回

今回講座に参加しての「収穫と問題」を自分なりに整理してみよう。  
六回目は最終回だから、市民講座の経過と成果を指針のごとく検討する。

人間中心の健康文化思想を持てたら、どんな分野の活動にも使えますか？  
今回の市民講座を健康文化活動の「質の保証」として理解しましたか？

## おわりに

今回の市民講座で取り上げた健康福祉に関する説明は、市民社会の時代における普遍的な自己研修と事例研究に生かすことを目指して編集するよう心がけた。その意味で応用の可能性は広いはずだが、そのよう参加者等に受け止められたら幸せである。なお、本稿の文化規範、四面大王と二面神、何れも「東洋文化を基盤に西洋の科学技術を融合する」自律体制の重視であり、これは人間中心の価値転換を指向している。

本稿の人間中心の地域開発の本質を理解すれば、専門や土地や国状が違って、基本は同じことに自然に気付くであろう。今の世の中、多くのことが「違う」と言う意識で仕事をしやすいので、チームワークが組みにくい。そこで、人間性回復の発想へ転換すると、「健康文化の時代の地域開発」という言葉が自然に浮上してくるだろう。

## 付録 1: 健康文化/健康福祉に関する市民講座の質の保証の進め方

主題に関するこれまでの要約を踏まえ、最終回はその応用として今回の市民講座の見直しをみんなで行いたい。

一章：市民社会の時代では人間中心の「健康文化」はみんなの願いであり、これは図 1 の健康福祉の目標から始まる。この図 1 を踏まえると「福祉と保健・医療の連携」という現代的要請も反映して、みんなが「二面神」になることが要請される。

二章：上記の想いを把握する方針として「規範の管理」があるが、これは人間中心の健康福祉を語る場合の重要な事柄である。従来、この捉えは的確にされていないので、本稿ではそれを図 2 の自律調節モデルに機能的に集約し、教育研修と地域ケアに注目して検討する。**ここまでを市民講座の一回目に説明し、グループ討論で確認するが、その際に世話人達の準備段階の気持ちの変化など報告して貰う予定である。**

三章：健康福祉の保健開発に共通する研修指針(理念)となる「知識と姿勢と実践」がある。これは教育研修と地域ケアの相似的認識を主体的に行う知識、自己組織化に向けた三つの質に関する自律平衡(四面仏のイメージ)、地域ケアの組織的展開である。この三章は私たちの発想の転換に必要な部分である。

**今回の市民講座では二回目から四回目まで WIFY 交流学习を入れながら演習とグループ討論を繰り返すことにしよう。最初の素材は既述の精神保健福祉に係わる NPO 法人と家族会の話が三章の全体に及ぶからよいだろう。二番目は、それを踏まえ、教育研修に焦点を当てた素材を予定している。そして三番目は三つ環の調全体制に注目した素材を予定している。**

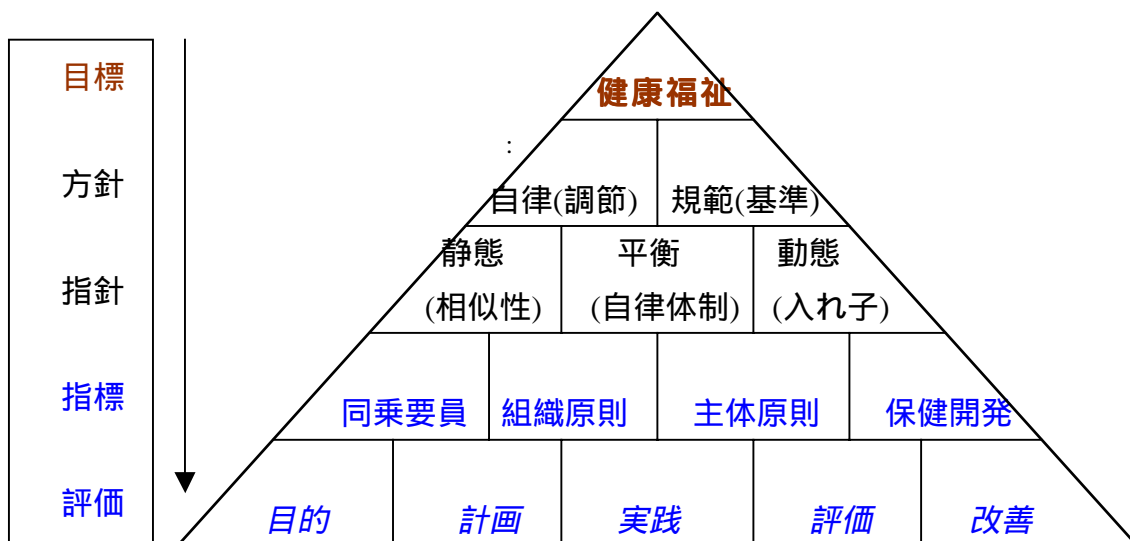
**何れにせよ、WIFY は人間性回復への発想の転換の教育研修の手段であり、地域ケアを順調に展開する優れた技法だと心得て欲しい。**

四章：地域ケアは四種類の同乗要員、その実践指標は施設ケア(教育)、専門ケア(教育)、相互ケア(研修)、自己ケア(研修)の四項目を四輪と見なした乗り合いバスは組織化の四原則に支えられているが、この成果は「質の保証」により自律体制の可否を関係者の協議で見直すことになる。**この四章は WIFY の四回目と組み合わせることで、具体的な対策活動の経過と成果を健康文化に照らして総合評価できる素材を使いたい。しかし、既成の素材でそこまで資料を準備できるか心配である。**

**五章：** 上記の四項目を受けた五章は、価値転換により地域開発の観点から健康文化と健康福祉の関係を四面仏として描いた図 5 の質の保証の要約である。しかし、その見方を図 6 のように再編成すると、最下段の「評価」は今回の市民講座の経過と成果を「市民社会の時代の地域開発の人材開発の五段階」として検討することになる。

これは今回の市民講座の最終回(六回目)に行うから、これで研修指針と研修日程の整合性が取れる。なお、この「質の保証」に関する検討の方が参加者に身近な方法として分かりやすいだろう。

図 6: 健康福祉の保健開発から健康文化の質の保証への道筋



## 付録 2: 研修ガイドラインの作成中の世話人の感想と意見

この研修指針の原型がほぼできる段階以降に世話人から寄せられた感想と意見を掲載しておこう。なお、その一部は丸地が修正し、コメントを加えて読者の便を図った。また、この研修指針の準備段階で丸地自身が感じた重要な点も平行させて記載し、私達の世話人会の舞台裏をお見せすることにした。

実際の研修ガイドラインでは、以下に八ページに及ぶ世話人等の感想と意見が載っているが、今回の改訂では削除した。その代わりに、オリエンテーション用記事を以下に掲載する。

## 今回の市民講座のオリエンテーションのために

水先案内人 丸地信弘 (2003.8.27)

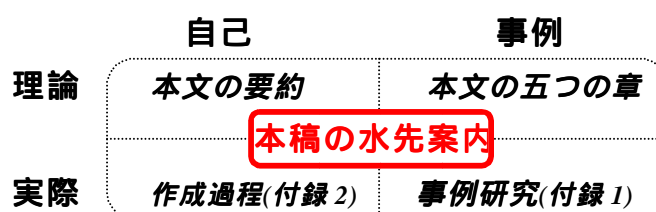
### 先の研修ガイドラインと本稿記事とのイメージ的關係

先の研修ガイドラインは四部構成(本文の要約、五つの章、事例研究、作成過程)であり、それは図 A に表したよう、中核となる本稿記事を取り囲む支援環境になる。

当初、本稿は今回の市民講座の最初の水先案内だけの積もりで取りかかった。

しかし、実際に手を付けてみたら、本稿と研修ガイドラインの幅広い関わりを意識するようになった。

図 A: 本稿と研修ガイドラインの關係



### 研修ガイドライン発送後の編集者の意識変化

#### 1. 健康文化の科学接近として本稿を準備

8月22日

本稿は健康文化の科学接近になる配慮をしている。そのため、**文化規範**の「温故知新、二人三脚、三位一体、四本の柱」を基盤におき、そこに**新しい健康の定義**の「全霊・社会・精神・身体(物理)的幸せの動的状態」を盛り込むことになる。なお、本稿では従来の健康の定義である「身体・精神・社会的幸せの静的状態」は隠し味になり、これは本稿では概して新しい健康の定義の<入れ子>になっている。

#### 2. 研修ガイドラインに関する温故知新

8月24日

研修ガイドラインの要約となる付図 1(Think Globally)と最後の健康文化の事例研究の三角モデル(Act Locally)は、温故知新の全霊的認識になると考えて図 B に表した。

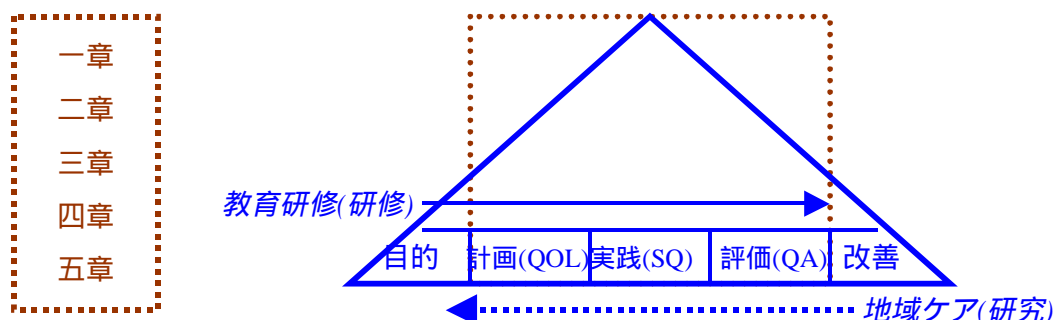
図 B の縦軸は健康文化の認識過程、横軸はその事例評価は三角モデルの五段目に注目している。後者の計画・実践・評価という捉えは生活の質・組織の質・質の保証の研修過程であり、この逆方向の捉えは地域ケアの事例研究の進め方である。したがって、自律的に問題改善する人間中心の知恵が備わり、発想の正常化を役立つだろう。

ここで、**健康文化の時代の「生活の質」**は主体化の四原則(自立、学習、対話、共感)、**「組織の質」**は組織化の四原則(ニーズ指向性、住民参加、資源の有効活用、協調と統合)、**「質の保証」**は自律性を意識して教育研修する必要がある。

一方、**地域ケアの事例研究**では上記の三つの質は逆方向から活用するから、「質の保

証」は組織の質と生活の質の質量一体の自律性を指標に総合評価することになる。

図 B: 研修ガイドラインの温故知新で見え始めたこと

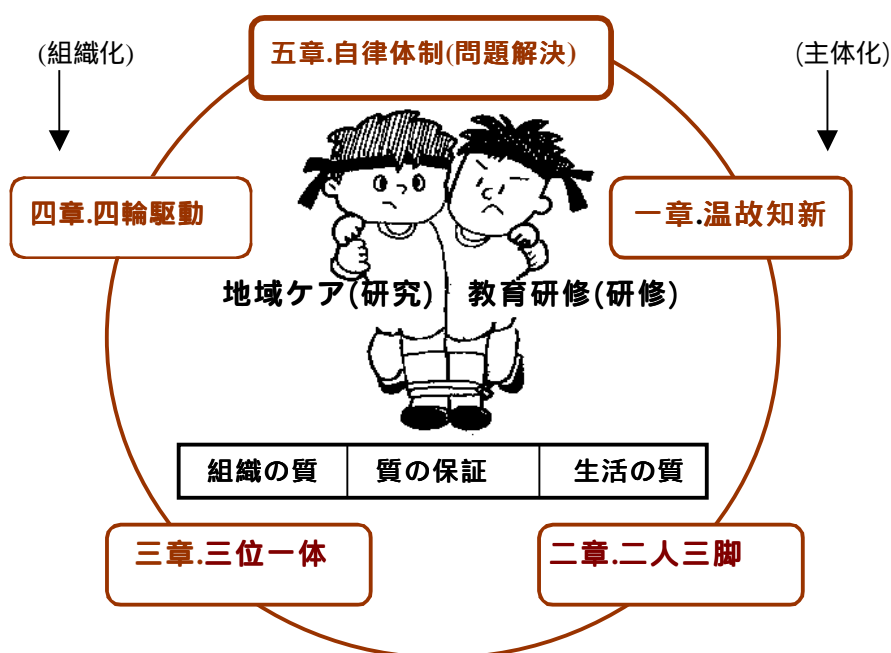


3. 二人三脚で健康文化を見る目、語る目、動かす目 8月25日

上の図 B を人間中心に社会化すると、図 C の健康文化の<自律調節モデル>に組み替えることができる。ここで、三角モデルは二人三脚、付図 1 の五つの章は支援環境になる。

図 C は研修ガイドラインの図 2 と補完関係をなし、前者(図 C)は健康文化、後者(図 2)は健康福祉に注目しており、Think Globally と Act Locally の関係を意識しよう。

図 C: 健康文化を見る目、語る目、動かす目



そうしたことから、図 C は地域開発の健康文化を見る目、語る目、動かす目になり、

これは人間中心の健康文化の<発想の正常化>に役立つことになる。

### 見る目(原理)

図 C 真ん中の捉え方で、健康文化的な問題解決を自律的に図る原理である。

これは研修ガイドライン五章の四面大王を真ん中におく図 5 を受けた捉え。

### 語る目(原則)

教育研修と地域ケアの二人三脚で質の保証を図るという時計回りの研修原則。  
健康文化に関する教育研修を前提に地域ケアの問題改善を図る三・四章に注目。

### 動かす目(理念)

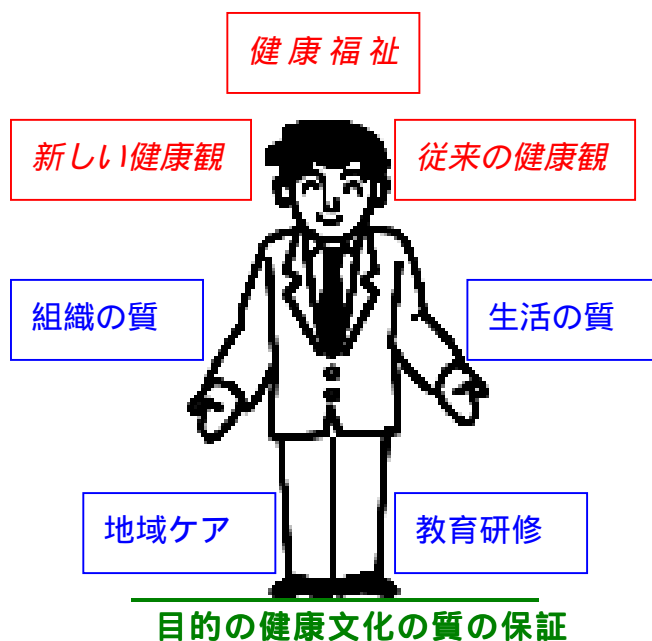
地域ケアの組織展開で自律調節的に問題改善をする時計反対回りの研究理念。

総合評価は質量一体の「質の保証」を通し自律調節を図る図 B の横軸に注目。

## 4. 健康文化の前提理論の三位一体と実践展開の「四本の柱」 8月26日

上の説明を受けて、健康文化の精神的理解のため、七つの構成要素を意識したい。  
普通、人々は心眼の「健康福祉」から関心がはじまり、先の研修ガイドラインも同じ  
記述順序である。そして、新旧の健康の定義を左右の目として図 D のよう確認するが、  
これは「福祉と保健医療の連携」が共通願望にあり、健康文化の必要条件である。

図 D: 健康文化の質の保証に係わる七つの要素



上記の前提知識を踏まえ、健康文化の四要素(十分条件)として、図 D の両腕にある

組織の質・生活の質、両脚にある教育研修と地域ケアが浮上してくる。この場合、「質の保証」は<隠し味>として心臓部に位置づき、生命を維持し平衡を保つ基盤になる。

上記の七要素は質の保証を目指す「健康文化」という地盤の上に成り立つ必要かつ十分条件であり、これは「文化と科学技術の融合」を意味している。このよう、社会の仕組みも身体的(構造と機能)に例えることで、共通理解が飛躍的に増すであろう。

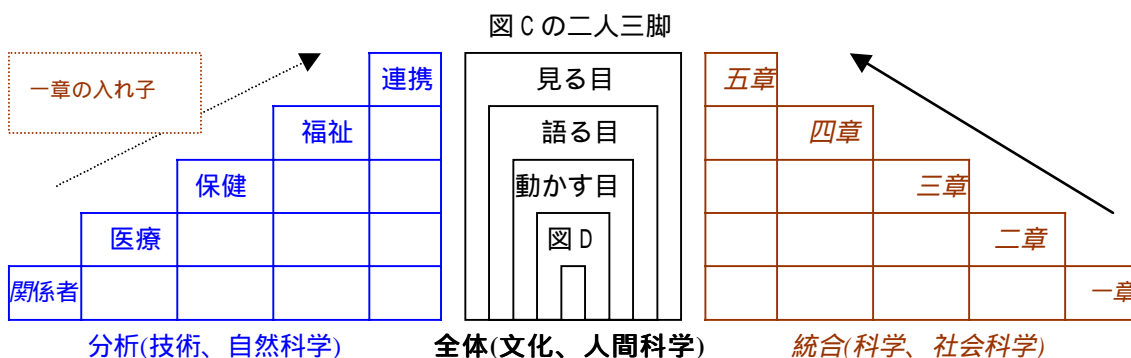
以上で文化規範と新しい健康の定義の全霊。社会、精神、身体的幸せとの組合せによる説明をした。そこで、最後は残された<動的状態>として総轄する説明をしたい。

## 5. 既存知識と研修ガイドラインと本稿記事の関係 8月27日

上記の本稿の捉えを踏まえ、研修ガイドラインとの関係を図 E の動態状態として総轄しよう。左側の分析(技術)はみんなの願いである<福祉と保健医療の連携>、右側は研修ガイドラインの統合(科学)であり、真ん中は本稿の健康文化の人間科学である。

図 E は総合科学モデルと呼んでいる。普通、図 E の真ん中の健康文化の人間科学が本来の姿だが、実際は分析と統合という自然・社会科学の積み重ねのすえ、はじめて本稿のような健康文化の問題解決の動的状態を意識することになる。

図 E: 既存知識、研修ガイドラインと本稿の関係



## 文化と科学技術を自然に融合する人間中心の健康文化を育てよう

人間社会の問題解決は、分野や土地柄に関係なく、人間中心の健康文化を基盤に科学技術を生かすことが自己矛盾ないはずである。ところが、現代社会はその当たり前なことを忘れ、自然科学的にものごとを定義化したがる傾向が強いのは残念である。

その軌道修正には、相互理解を大切にする「生涯研修」が有効である。そのため、今回の市民講座でも各自が先ず「主体化の四原則」を大切にし、その上で仲間と一緒に「組織化の四原則」を確実に生かすこと心掛けて頂きたい。

